

東北芸術工科大学 デザイン工学部

建築・環境デザイン学科 年報2022

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2022



人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン



TOHOKU UNIVERSITY
OF ART & DESIGN

はじめに

ソ連が崩壊し世界が大きな転換期を迎えた翌年、東北芸術工科大学は開学しました。それから30年。本学が歩んできた月日は、私たちの生活を大きく変化させました。1990年代後半にインターネットが普及し、2000年代にはスマートフォンが登場することによって、常に世界と繋がるのが可能な時代になり、そして、新型コロナウイルス感染拡大により、オンライン通信技術が急速に生活に浸透し、自宅に居ながらインターネット端末の画面越しに講義を受講することができるなど、情報技術が社会生活において欠かせない存在となりました。さらに、ソーシャルメディアの普及により、個人が情報を自由に発信、共有することが当たり前になることで、データの蓄積や分析技術の発展によりAI技術が急速に進化し、ChatGPTによってAIが文章を自動生成してくれる時代が到来しました。

建築・環境デザインの分野においては、製図ペンをういて描いていた設計図面が、ノートパソコンの画面の中で自由にスケールを変え、描くことが主流になり、ストレッチボードで作成していた模型は、パソコンの中でモデリングされたフォトリアルな3Dパースに替わり、その情報がそのまま工事現場で施工されるまで情報技術は進歩しました。そして、AI技術の進化に伴い、簡単な文章（例えば、建築家〇〇〇〇風の図書館の画像など）を入力するだけで、画像生成AIのプロンプトが自動生成され、リアルなイメージパースが容易に作成される時代が到来しつつあります。おそらく数年後には、設計の与条件を入力するだけで、瞬時に全ての設計図面をAIが描く時代が訪れるでしょう。AI技術との共存社会の足音がすぐそこに聞こえている今だからこそ、本学科が標榜する「人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン」について改めて考える必要があるのではないのでしょうか。

今年度の年報の特集は、「開学30周年の歩み」と題し、本学科設立当初から教育に関わられてきた山畑先生と三浦先生へのインタビューを通して、開学当時から現在までの学科の歩みを振り返ります。また、2022年9月23日に開催した30周年記念トークイベント「ホームカミングデー」で語られた7名の先生の言葉を記録します。黎明期から社会を見つめながら実験を重ね、地域と密接に結びつき共に歩んだ30年を振り返り、本学科の根源に触れることで、情報技術の発展に対し、盲目になることなく、人間、社会、自然の関係を把握し創造性をもって真価を見極める、新たな時代のクリエイターの姿が見えてくるように思います。

(佐藤充)

目次

特集

東北芸術工科大学は2022年4月に開学30周年を迎えました。そこで、開学30周年を記念し、開学当初、教鞭を執られた先生をお招きし、当時の教育に対する想いなどをお話しいただくトークイベント「ホームカミングデー」を開催いたしました。

今回の特集記事には、「開学30周年の歩み」と題し、本学科の30年を振り返ると共に、これから本学科が目指すものについて考えてみたいと思います。

30周年の歩み インタビュー	6
開学30周年記念イベント「ホームカミングデー」	9
30周年の歩み 教員アーカイブ	11

教育報

年度ごとに、演習課題を中心とする教育の成果をまとめています。

1年生では、前期に造形や表現の基礎となるデッサンや立体造形、インテリア空間の造形トレーニング、後期に設計の基礎となる図学・製図、CADの習得や施工体験といった演習を設定しています。

2年生は、木造軸組構造から成るタイニーハウスの設計を通して木造建築の構造の基本と応用を学ぶ演習から始まり、続いて建築や環境をデザインする上では欠かせないフィールドワークについて学びます。後期には、住宅とその周囲に展開するランドスケープを続けて設計し、建築とその周囲の環境を一体的に計画します。1年を通じて建築と環境をひとつながりのものとして総合的に考える課題を設定しています。

3年生は、2年生での総合的演習を踏まえ、前期前半/後半、後期前半/後半の4つの期間のなかで、各自の興味や関心、進路に併せて演習課題を選択します。建築、ランドスケープ、都市や集落の研究、そしてそれぞれの領域を横断する内容の課題を設定し、地域の様々な問題に目を向け提案につなげてゆきます。

4年生ではこうした学びを経た集大成とし、各自が課題を探り、調査・研究を行い、卒業論文、あるいは卒業設計へとまとめてゆきます。

1学年	建築・環境基礎演習	12
	建築・環境施工演習	
	インテリア基礎演習	13
2学年	タイニーハウスの設計	14
	フィールドワーク入門	
	住宅の設計	15
	住宅のランドスケープデザイン	
3学年	エコタウンの設計	16
	リノベーション演習	17
	市街地計画	
	農村計画	

構造デザイン ドイツ・山形の都市分析と サステイナブルプランニング	18
---	----

街と世界に開く東北芸術工科大学の図書館 ランドスケープ総合デザイン	19
--------------------------------------	----

研究報

学生生活の集大成となる卒業研究・設計、修士研究・設計は、学生たちが自ら社会の様々な課題を見つけ出し、それと真摯に向き合い調査・分析を通して、論文あるいは設計というかたちでまとめます。ここでは、1年間を通して課題に対峙し、提案された研究成果をレビューします。

併せて、各研究室や学生・有志による地域と密着したプロジェクト、学科で主催した各種講評会の概要、学生たちの学外でのコンペティションで得た評価等についてご紹介します。

卒業研究・設計 「栃尾の雁木通り」の現状と文化的価値	20
----------------------------	----

地域に溶ける線状大学 可動産建築の可能性と模索	21
----------------------------	----

積層する許容と空間 たむぎのぐらし	22
----------------------	----

総評	23
----	----

修士研究 ストリートリノベーション	24
-------------------	----

プロジェクト 山形R不動産 リノベーション	24
--------------------------	----

プロジェクト ツリーハウス セルフビルド	25
-------------------------	----

プロジェクト 早戸温泉環境整備実習 環境	25
-------------------------	----

只見町周辺環境整備実習	26
-------------	----

プロジェクト 鮭川村空き家等利活用プロジェクト 地域との連携	26
-----------------------------------	----

プロジェクト 山形市吉野宿の三堂実測調査続編 歴史	27
------------------------------	----

各種講演会 環境的未来型 工藤浩平氏 環境的未来型 指出一正氏 ワンデイプロジェクト 増田信吾氏	28
--	----

コンクール等 受賞者の紹介 JIA東北建築学生賞 JIA東北学生卒業設計コンクール	29
---	----

第29回ユニオン造形デザイン賞 「大きな家」コンクール	30
--------------------------------	----

第16回長谷工住まいのデザイン コンペティション「循環する集合住宅」	
---------------------------------------	--

東北芸術工科大学

芸術工学会

せんだいデザインリーグ2023

トウキョウ建築コレクション2023



今年で建築・環境デザイン学科は、設立30周年を迎えました。本特集では、設立当初から学科の立ち上げに関わってきた山畑先生・三浦先生へのインタビューを行うとともに、歴代の先生を紹介することで30年の歴史を紐解きます。

インタビューを通して見えてきたのは、学科には大きく3つの時代があったことです。開学当初の先生の思いが、学生・社会・地域へと広がっていく様子を辿っていきます。



山畑信博教授（上） 三浦秀一教授（下）

黎明期 —新しい環境を切り開く—

—まずは、設立の経緯を聞かせてください。

山畑 学科がスタートしたのは1992年の大学設立時からです。その前から着任が決まっていた先生が集まって、どういう学科にしていくなかを話し合ったのを覚えています。そこで「これからの時代は建築だけではなく、周辺環境まで考える学科をつくるべきではないか」というコンセプトから「環境デザイン学科」という名前が生まれました。

—現在は「建築・環境デザイン学科」ですが、当初は建築が付いていなかったのですね。

山畑 あの頃は、都市計画の先生が多く在籍し、また、ランドスケープが専門の三田先生が、自然や風景も合わせて建築・都市を考えるという方針を打ち出していました。

—その方針は今でも継承されていますね。授業の内容も今と違うのでしょうか。

三浦 現在の演習は「建築系」と「環境系」を選択する形式ですが、もともとは全員が同じ演習に取り組んでいました。建築系は、ベーシックに住宅・小学校・集合住宅などの設計。環境系は、自治体の総合計画や地域の活性化案の検討に取り組んでいました。

山畑 当初から、山形県・山形市からの依頼もあったので、現場に学生を連れて行くことも多かったと思います。

転換期 —建築とランドスケープの融合—

—昔から地域密着型の演習スタイルだったのですね。設立当初の教育方針が変化したタイミングはいつでしょうか。

三浦 少し変化があったのは、新しい建築系の先生が着任した頃です。建築設計が専門の小沢先生が学部長・学長になった頃に、元倉先生・竹内先生が着任し、そのしばらく後に学科名にも「建築」を加えることになりました。

山畑 都市計画の先生が少なくなった分、山形という場所性を踏まえてランドスケープの先生を充実させましたね。ランドスケープを「計画の対象」としてではなく「デザインの対象」として位置づけたのもこの頃です。それに先だって、建築領域とのコラボレーションもありました。例えば、「西川町 原風景調査」では、ランドスケープ領域の先生と建築領域の先生が町原風景について調査し、その結果を踏まえて景観から建築を考えるという連携がありました。

—ここで、ランドスケイプと建築が融合していったんですね。

山畑 あとは、「施工演習 (p.12)」がはじまったのもこの時期ですね。学生の中でも、施工演習を楽しみにしている人が多い印象です。

三浦 他の大学で、木を切る授業はなかなか無いですからね (笑)

展開期 一地域と社会に向き合う

—次に動きがあったのは、いつでしょうか。

三浦 「エコハウス」や「リノベーション」に力を入れはじめた時期でしょうか。2010年頃に、地球温暖化などの環境問題が取り上げられるなかで、建築・都市がどう向き合うかを問われていました。私がおの分野の専門だったこともあり、学科の先生数名と海外調査に行き、エコハウスの構想が生まれました。その後、竹内先生が設計を担当して、いくつかのプロジェクトが動き出しています。馬場先生が着任して、リノベーションのプロジェクトをはじめた時期とも重なっていますね。

山畑 演習の試行錯誤をはじめたのもこの頃です。演習を選択性にして、教員の個性が現れる内容に変えていきました。

—学内だけではなく、学外のプロジェクトがはじまったのもこの辺りでしょうか。

山畑 「ヤマガタ蔵プロジェクト」が最初だと思います。昨年で20年目なので2003年からですね。きっかけは学生からの提案でした。東京出身の井手さんが、卒業研究で蔵の活用を提案したのですが、大学院に進学したときに蔵を貸してくれる方が現れ、実際にカフェ

として運営することになりました。行政の方や地元の方たちと一緒に実行委員会をつくって案をブラッシュアップし、学生主体で掃除から空間の整備、カフェの設えまで行いました。三浦 学生の主体性とオーナーとの出会いが重なった、素敵なプロジェクトですね。

山畑 そうですね。学生のトライアル運営が上手く行ったことで、オーナーさんが本格的に運営することになりました。その後も、毎年有志の学生がイベントを開催したり、蔵MAPをつくったりと活動を広げてきました。コロナ禍で継続は難しくなったのですが、山形市の蔵の保存活動にも寄与したはずですよ。

三浦 2006年から、構造が専門の松本先生が「志津温泉 雪旅籠の灯り」をはじめましたことも印象的です。昔の町並みを雪で再現するイベントで、有志の学生が毎年現地に行っていました。あとは、2010年に馬場先生がはじめた「山形R不動産 (p.24)」も、蔵プロジェクトの延長線上にある取り組みですね。七日町の旅館をリノベーションしたシェアハウス「ミサワクラス」では、学生が企画・設計に関わるだけでなく、実際に住むことが大きかったように思います。芸工大の学生は、大学の近くに住む人が多いのですが、これを機にまちなかにも目を向けるようになった気がします。

—2000年以降は環境課題に向き合うとともに、リアルな社会課題を解決するために活動がまちに広がっていったのですか。

山畑 その後は、東日本大震災がありました。学生が落ち込んでいたので、楽しいこと



山形エコハウス (上)
カフェとして運営することになった蔵オビハチ (中)
雪旅籠制作の様子 (下)

	黎明期			転換期					展開期									
年度	1992	1994	1996	1998	2000	2002	2004	2006	2008	2010	2012	2014	2016	2018	2020	2022		
世相	■阪神淡路大震災								■建築士試験制度変更 ■洞爺湖サミット			■東日本大震災		■新型コロナウイルス				
方針									★演習選択制へ・施工演習が始まる			★演習専門特化型の内容へ		★オンライン授業化				
書籍・調査	○山形市景観調査			○山形県近代和風建築総合調査 ○山形県近代化遺産総合調査					○「建築・環境デザイン入門」発刊 ○「未来の住宅」発行			○長井市文化的景観選定基準調査 ○山形県茅葺屋根建造物継承事業調査 ○上山市橋下宿歴史の建造物調査 ○大江町歴史の建造物実測調査 ○長井市重要文化的景観調査						
プロジェクト活動	●阪神淡路大震災調査 ●森づくりの会			●蔵プロジェクト ●志津温泉 雪旅籠の灯り					●TRST 東日本復旧復興計画支援チーム ●気仙沼大沢地区復興支援 ●赤湯十部一山環境ツーリズム ●ツリーハウス ●マルアール ●湯浜温泉エリアリノベーション ●小屋づくり ●タウンワークス ●ぶどう畑のレストラン ●山形エコハウス ●無印良品の家「都市型エコハウス」 ●ミサワクラス ●赤湯駅インテリアリノベーション ●ストリノ ●山形R不動産 ●山寺ホテル ●早戸温泉環境整備実習 ●上栲田米づくり ●「サウナのあるところ」 ●飯豊町エコタウン ●鮎川村空き家再生 ●只見駅周辺魅力向上事業 ●竹の露酒造りリニューアル									

開学30年の年表



気仙沼大沼地区復興支援プロジェクト



郁文堂書店プロジェクト

をはじめようと「ツリーハウスプロジェクト (p.25)」をはじめました。また、気仙沼市の大沢地区復興支援プロジェクトでは、震災直後から足繁く通って成果をあげています。三浦 最近では、完全に学生主導のプロジェクトも生まれています。閉店していた本屋をリニューアルした「郁文堂書店再生プロジェクト」では、クラウドファンディングによる資金調達から設計・施工まで行っていました。当時学生だった迫沼さんは、在学中に起業をして、現在も市内でカフェを運営していますね。山畑 学生の主体性が育まれたことで実現できた取り組みですね。最近話題になっている、廃校を再生した「やまがたクリエイティブシティセンター Q1」なども、そういった小さな場づくりの機運が醸成されていたことで生まれたプロジェクトかもしれませんね。

これから —東北に根ざしながら世界を見る—
— 学科の歴史を紐解くことで、今のような授業内容やプロジェクトに至ったのか理由が分かったように思います。今回は、これまでの30年を振り返りましたが、最後に、これ

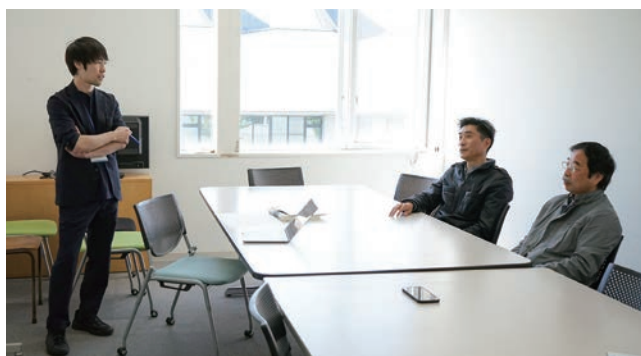
からの建築・環境デザイン学科について伺えればと思います。今後の展望はどのようにお考えですか？

山畑 開学当初は「今までにない学科をつくりたい」という思いから、周辺環境を見渡した中で新しい建築・都市を考え、地域にいい影響を与えることをコンセプトにしてきましたが、その考えはだいぶ育ってきたと思います。エコロジーの話など、常に時代の先端をリードすることで、全国から学生も集ってきたように感じます。これからも、「次の何か」を見つけて欲しいと思います。東北固有の課題に向き合いながらも、同時に視野を広げ続けることが重要ですね。

三浦 これからは、難しい時代になると思います。特に、人口減少は避けられないので、地方・自治体だけで頑張るには厳しい面もあります。これからは、都市部・大企業との連携など、ローカルに根ざしながらもグローバルな視点が必要になってくると思います。私たちの学科も、これまで試行錯誤を繰り返してきたので、若い人たちにも新しいチャレンジを続けてほしいですね。

—ありがとうございます。大学設立の宣言の結びにある言葉を思い出しました。「わが大学の前に道はなし。あるは、歴史的实验のみ。」建築・環境デザイン学科の实验も現在進行系ですね。

(聞き手：加藤優一 2023年4月27日)



インタビューの様子

開学30周年記念イベント「ホームカミングデー」



2022年9月23日 本学科黎明期から教鞭を執られていた7名の先生をお招きし、「創設ヒストリー」、「過去>現在>未来」の二部構成で開学30周年記念オンライントークイベントを開催しました。開学当初、どのような想いをもって学科を創設され、どのように教育をデザインされたのかを振り返っていただきました。また、オンラインで参加いただいた卒業生と、パソコンの画面越しに再会し在学当時の思い出や近況報告を行う一幕もありました。イベント最後に、竹内昌義先生から「小沢先生の“表現するということの意味”と、三田先生の“環境デザインの環境というのは社会問題の環境からこの学科は位置づいている”という話を伺い、エコハウスや、エアリアルノベーションなどの現在の学科の活動は、設立当初の環境デザインの考えに導かれていたことを再認識させられました。」と、黎明期と現在の本学科の連関について触れ、ホームカミングデーは閉幕しました。

ここに、トークイベントで語られた7名の先生の言葉を記録します。先生の言葉は、私たちが学ぶ建築・環境デザイン学科の根源を示すと共に、この先の未来の進むべき道を示唆しているのではないのでしょうか。(佐藤充)

第一部「創設ヒストリー」

登壇者：和泉正哲先生 (zoomにて参加)、小沢明先生、三田育雄先生

モデレーター：山畑信博先生

第一部では、前半、和泉正哲先生にzoomにてご講演いただいた後、小沢明先生、三田育雄先生にどのような教育を目指したのかについてお話をいただきました

人生は短い。常に理想を抱き、現実に対処せよ。 和泉正哲先生
開学30周年おめでとうございます。私は、1994年から1999年

の5年間芸工大で教えました。開学当時の大学は、古い大学の悪い慣習がなくフレッシュであり、多様な学生が在籍していました。私は、建築構造を主に教えていましたが、講義では、人生について話すことが多々ありました。それは、人生は非常に短いということです。1mm方眼紙の1マス、1mm平方を1日と捉えた時、人生を85年とすると、A4のたった半分。つまり、紙一枚にも満たないわけです。この非常に短い人生を大切に生きてほしいと伝えてきました。

また、「常に理想を抱き、現実に対処する。」ということをお忘れずに生きてほしいと思っています。理想を忘れてはいけません。しかし、理想だけを追いかけるだけでもよくないのです。理想を抱きながら、現実に対峙し、対処することを続けてほしいと思います。

デザインスタジオで学ぶ濃密な時間 小沢明先生

芸工大の学生には、「表現者としてどうあるべきか、どう成長してゆくかを卒業するまで学ぶのがこの大学である。」ということをお伝えしてきました。

私自身も建築デザインの表現者であり、自身の体験から物事を語ってきました。その根底には、ハーバード大学デザイン大学院 (GSD) のデザインスタジオ (演習室) で過ごした濃密な時間があります。建築・環境デザイン学科の中核は何といってもデザインスタジオにあります。デザインスタジオで如何に充実した時間を過ごすか。そこでの生活は建築デザインの道に進む者にとって非常に重要なものであると感じています。建築デザインの道に進みたいのであれば、24時間スタジオに張り付いて考え続けるタフな身体と精神が必要であり、24時間スタジオで友と学ぶことがその後の人生の糧となります。これが、他の学科にはない建築デザインに連綿と受け継がれた学習環境

であると思います。デザインすることと生活することは表裏一体であり、自分だけではなく友と切磋琢磨し学ぶことが宝になるのです。

地域に入り込み、肌で感じる地域密着型演習 三田育雄先生

本学科は、1980年代、環境問題が社会化していき、様々な角度から環境を捉えデザインするというで設立されました。環境デザインとは、建築、建築が集まる地域・都市、そして、それらを包摂するオープンスペース、農村をデザインの対象としています。それらをどのように融合しトータルに教育してゆくか。その構築は非常に困難でした。そこで、各領域の授業によって得た知識を持って、演習で総合的に考え、実践していく、演習を中心とした教育を目指すというカリキュラムが非常に重要でした。デザインを学ぶ大学であるため、何かを表現するということが課題であると思いがちですが、表現の前に、環境問題をどのように把握し、その問題をどのように解決するかの構築が非常に大切で、かつ難題であります。表現は最終的なアウトプットです。その前段階の調査が重要であり、それを無くして環境問題の解決はできません。

地域においては、地域の事情を察知し、それをどう解決するか？ 地域の中での活動経験を重ねることで実際に見えてくるものがあります。つまり、地域へのアプローチ、地域のなかに入り込んでの調査、分析が大切です。

演習フィールドである地域に入り込み、地域の方々と話して、答えを見つける。そのためには、何度も地域に出入りし、地域行事に参加し、地域を肌で感じ取り、潜在的な声を吸い上げることを大切にしました。そのために、教員、学生が地域に通い、地域密着型の演習、卒業研究、設計を試みました。

山形には、演習フィールドとなる資源がたくさんあります。また、大学には、常に表現することができる演習室という環境があります。これらの資源を存分に活かして欲しいと思います。

第二部「過去>現在>未来」

登壇者：相羽康郎先生、松本年史先生、温井亨先生、杉山岳巳先生（zoomにて参加）

モデレーター：三浦秀一先生

第二部では、在職時の演習の取り組みやエピソードなど印象に残っていることについてお話いただきました。

1～2週間で取り組む小課題 相羽康郎先生

元倉真琴先生と1～2週間で小課題を出すという演習を出題したことが印象に残っています。特に、現在、映画監督として活

躍されている渡辺智史さんの作品が印象に残っています。彼の作品は、時間内に終わらず未完成が多いため点数は低いのですが、発想が素晴らしかったことを覚えています。この課題は、最終的に作品集としてまとめました。

芸術大学で学ぶ構造デザイン 松本年史先生

工学部ではなく、芸術大学ならではの構造とデザインの教育について常に考えていました。印象に残っている課題は、小屋を作るというものです。自分が最低限身を守ることでできるシェルターを原寸大で製作するというを通して、構造のセンスを養う課題を行いました。また、月山志津温泉での活動がとても印象に残っています。雪をスクリーンに映画祭を開催したり、かまくらを作ったり、雪で旅籠を作るという活動をしました。その活動が後に、「雪旅籠の灯り」となり継承されています。コロナによって、活動が制限されていますが、積極的に人と人の交流を図って欲しいと思います。

元気があった学生 温井亨先生

小林敬一先生を中心とした都市計画（住宅地のデザイン）の演習が印象に残っています。葡萄畑を開発して住宅地をデザインせよという課題に対し、「なぜ美しい葡萄畑を整地して住宅地にする必要あるのだ！」という課題の内容に異を唱える学生がいたり、実際に住宅地計画がある場所に対して、反対運動を起こしたりと元気のよい学生が多くいました。教員の指導を真正面から受け取るのではなく、それとは全く違うことをやるくらいの気概のある学生が、今は少なくなり、少し寂しく感じます。

学生と密接だった教員 杉山岳巳先生

芸工大で印象に残っているのは、学生と教員の関係がとても密接だったということです。夜遅くまで学生の演習の指導を行い、朝から晩まで学生と共に学んでいた印象があります。これは、芸工大特有の学生と教員の関係ではないかと思っています。

30周年の歩み 教員アーカイブ

退任教員



高野公男（専門：建築学、都市計画）

1936年神奈川県生まれ（2015年没）。1962年東京大学大学院数物系研究科修了。1964年マヌ設計連合設立。1992年～2007年本学科教授。2007年～本学名誉教授。主な作品に「キャロンス्यूズ本社」など。



小沢明（専門：建築設計）

1936年中国大連市生まれ。1964年ハーバード大学大学院建築修士修了。1980年～小沢明建築研究室主宰。1993年～2006年本学科教授、2002年～2006年本学学長、2006年～本学名誉教授。



三田育雄（専門：造園計画、地域計画）

（株）田園プラザ川場代表取締役。 （株）ラック計画研究所代表取締役。 1939年東京生まれ。東京大学生物系大学院修士課程修了。1993年～本学科教授。2006年～本学名誉教授。2007年～長野大学教授。



和泉正哲（専門：建築構造学）

大崎総研顧問。1930年東京生まれ。東京大学大学院博士課程修了。1994年～東北大学名誉教授。1994年～本学科教授、1999年～本学名誉教授。2008年日本建築学会賞大賞。



元倉真琴（専門：建築設計）

1946年千葉県生まれ（2017年没）。1971年東京藝術大学大学院美術研究科修了。1980年～スタジオ建築計画。1998年～2008年本学科教授。2013年～本学名誉教授。主な作品に「熊本県営竜蛇平団地」（日本建築学会賞）など。

水島孝治（専門：都市計画）

1943年生まれ。東京大学工学部都市工学科卒業。1992年～2002年本学科教授。主な著書に『土地の利用と制限：都市計画からの視点』など。

在職教員

三浦秀一（専門：環境計画）1992年着任

小林敬一（専門：都市計画）1992年着任

吉田朗（専門：都市計画）1992年着任

山畑信博（専門：構法・景観計画）1994年着任

竹内昌義（専門：建築設計）2001年着任



相羽康郎（専門：都市計画）

NPO 法人まちづくり山形理事長。1951年東京都生まれ。早稲田大学大学院修士課程修了。1991年東京大学先端科学技術センター客員助教授。1996年～2018年本学科教授。主な著書に『都市計画教科書』（共著）など。



松本年史（専門：構造設計）

（有）松本構造設計室室長。1951年福岡県生まれ。1977年東京藝術大学大学院美術研究科修了。1999年～2011年本学科教授。2011年～2022年共立女子大学家政学部建築・デザイン学科教授。主な作品に葛西臨海水族館など。



温井亨（専門：建築・都市・風景計画）

1958年東京都生まれ。東京大学農学部林学科、同工学部建築学科卒業。2001年～2004年本学科助教授。2010年～東北公益文科大学准教授、2013年～同大学教授。主な著書に『都市建築のかたち』（共著）など。



廣瀬俊介（専門：ランドスケープデザイン、地理学、景観生態学）

風土形成事務所主宰。1967年千葉県生まれ。東京造形大学デザイン学科Ⅱ類環境計画卒業。2003年～2013年本学科准教授。主な著書に『風景資本論』など。

Photo by 宮下太輔



西澤高男（専門：建築設計・メディアアート）

ビルディングランドスケープ共同主宰。1971年東京都生まれ。横浜国立大学大学院工学研究科修了。2012年～2021年本学科准教授。主な作品に「やはた幼稚園保育ルーム」など。



田賀陽介（専門：ランドスケープデザイン）

田賀意匠事務所代表。環境再生医（総合部門上級）。1964年岐阜県生まれ。多摩美術大学美術学部卒業。2013年～2016年本学科准教授。主な作品に「箱根ヤマノイエ計画」（第26回AACA賞優秀賞）など。

志村直愛（専門：建築史）2006年着任

渡部桂（専門：ランドスケープ）2004年着任

馬場正尊（専門：リノベーション）2008年着任

佐藤充（専門：建築設計）2021年着任

加藤優一（専門：まちづくり）2023年着任

1学年 建築・環境基礎演習

本演習は、建築や環境デザインの基礎トレーニングである。特に本学科の1年生に身に付けてもらいたいことは、技術よりも態度である。人や物や空間に興味を持ち、その観察から常に新しい発見を得るような状態になれることを意味する。まずは描くことからそれを始める。物や空間を描くことで、自分が目で捉えているものがいかに表層の印象であるかに気が付く。いわゆる絵の上手い下手は描かれた結果であり二の次である。何を捉え、何を描こうとしたか、その過程での観察と推察、対象そのものを本質的に捉えようとする考察こそが成果である。1人では気が付けないこともあるが、言葉にすることで互いの気づきを知り、理解を深めた。続いて立体を造り手で考えることを学ぶ。2次元と3次元では文字通り情報と思考の次元が違う。思考からアウトプットされた形が、即座に手と目によってインプットされ、次の形の案が生れる。それを体感した。演習を終えた学生からは、日頃の視線が変わったことや、創造の喜びが語られていた。これで準備運動は完了である。(渡部桂)



初めての立面構成に取り組む(上) 風景を描く(下)

1学年 建築・環境施工演習

本演習は、大学に隣接する県立都市公園「悠創の丘」をフィールドとしている。この公園は1998年に開設されており、本学が設立された30年前にはまだ未整備であった。1996年に元学科教員の三田育雄名誉教授とそのゼミの学生が中心となり、公園予定地に当地の里山の優占種であるコナラやミズナラを中心に植樹をした。山形盆地らしい緑の斜面の公園とするためである。それから26年が過ぎ、木々は大きく成長した。演習ではその空間を手入れしながら里山環境や自然素材に触れ、管理で発生する材料を用いてその場に相応しい構造物の計画・設計・施工を行っている。今年度は、複数ある演習地のうち北側の谷地がフィールドであった。学生は段々の地形や利用者の行動心理から構想し、階段や斜面の縁の柵、休憩のための腰掛けや縁台を設計・施工した。このフィールドは公園になる前は農地であったが、学生たちの作業のバトンのお陰で春にはキクザキイチゲ、フクジュソウの群落が開花して賑わう。当初目標とした山形盆地らしい緑地の風景も演習の成果と言えよう。(渡部桂)



2022年の演習地と作業風景(上) 1996年の演習地(植樹前)(下)

建築デザインを学ぶ大学生として、初めて自ら空間を発想し、創造する設計演習である。建築が外からどのように見えるかではなく、あくまでも建築を内部から考え、それはどのような空間であるかというインテリアの視点で空間を考えることによって、スケール感を体得することを目的とし、立方体という抽象的な空間と向き合い、模型製作と併せて手を動かして、幾何学的な操作によってインテリア空間を熟考する。最初は、スケールを把握しやすい4畳半に相当する2.7m立方の「茶室」をつくることから始め、建てる場所や見える風景、光や風をイメージしながらシンプルな操作による空間造形を行う。そして次に、空間を5.4m立方にサイズアップし、2つ以上の空間に分割し、空間に動線を作り、空間を変容させ、その形態の意味を探る。最後に、5.4m立方の空間にギャラリーという用途を加え、鑑賞する空間とシーケンスを考えることにより、スケール感と建築的な操作に慣れてゆくことを目指した。段階的に建築的創造へと発展してゆく3つの課題毎に、仙台で活躍する若手建築家をゲスト講師としてお招きし、講評いただいた。講評会では、模型とプレゼンテーションシートを用いて説明し、自ら考えたデザインを他者に伝達することの難しさや、建築の評価は一樣ではなく多様であるということを感じ取れたのではないだろうか。スケッチや模型製作を通して粘土をこねるように手を動かし、コンセプトを具現化する空間を探求することとはどのようなものなのかを経験したことが、今後の設計課題の糧となることを願っている。

2.7m立方の茶室 遠山翔太

木の壁で囲われた空を見る茶室である。ハンモックのように、壁面から布が張られ、寝そべりながら上部に開いた空を眺める。寝そべることで、床が撓み、利用していることを他者に伝え、壁と床の隙間から風を得る。壁と床という非常にシンプルな構成であるが、細部まで考えられた作品である。

5.4m立方の空間の分節 木村なぎ

5.4mのキューブに大小様々なサイズの孔が空いた床にて垂直方向に分割した作品。孔のズレ、重なりによって空間が伸び縮みし、高低明暗の多様な環境を作り出している。プレゼンテーションシートのドローイングも分かりやすく、総合的に優れた作品である。

5.4m立方の空間のギャラリー 逆井大志

5.4m立方に楔を打って破壊したような作品。講評会当日まで作品の全貌を見ることができず、完成し発表できるか不安が

あったが、その不安を大きく裏切った作品。破壊という空間操作によって生まれた内部と外部空間の偶発性がたいへん魅力的であり、手を動かし続けなければ辿り着かない作品である。模型表現も秀逸である。

(佐藤充)



課題1 遠山翔太(上) 課題2 木村なぎ(中) 課題3 逆井大志(下)

2学年 タイニーハウスの設計

この課題では、建築設計の第一歩として木造建築の基本となる軸組構法による建築の設計を行う。学科演習室に各自のスペースが与えられて初めての課題であり、友人たちの様子を伺ったり、情報を共有したり、お互いに刺激を与えながら作品を作り上げてゆく学生ならではのプロセスの重要性がここにはある。課題は、各自が設定した機能とそれにふさわしい学内の平坦な敷地に建つ延べ床面積7.3m²のタイニーハウスの設計である。1年次の造形的な課題とは異なり、建築として構造的に成り立つことを意識しながら設計する必要がある、その理解を深めるために1/10の軸組模型を製作する。最優秀となった渡邊咲來の作品は、夕日を取り込む大きな窓に臨んだ階段状の床に座って思考する心地よい空間を、図書館脇の水上に浮かぶ船に喩えて表現した秀作である。軸組のコアから張り出す床をワイヤーで吊った展望台の工藤大空や一本の木を囲んだ分棟型仮眠棟の岩原星来など、今年度は総じて模型の精度が高く、個性的な作品が多く見られた。(山畑信博)



最優秀賞 渡邊咲來 (上) 優秀賞 工藤大空 (下)

2学年 フィールドワーク入門

2年前期の課題として、この先建築・環境デザインの基本作業となる現地取材、情報収集、成果の可視化作業など、その名の通りフィールド＝土地を対象としたワーク＝作業の一連の工程を、各週1課題ずつ体験していく演習である。1週目は、自室の内観の実測作業。2週目は建築物の外観実測で、学内の校舎建築の立面図をグループの共同作業で体験する。3週目は山形市内七日町を対象として、1丁目から5丁目のエリア別に地図、航空写真、現地踏査を通じて自然、空間、生活、歴史の4つの軸性から特徴を読み解く作業。4週目は、リサーチした七日町の町並みの一部を切り取り、連続立面写真の歪み修正作業と道路断面図を作成。5週目は七日町の一街区を選んで土地の建築可能ボリュームをスケッチアップで立体図化する作業。本年度は6週目に初めて大学裏手の山村部の特徴ある風景を作画し、地図上にプロットする作業を加えた。7週目に全ての成果をA4版の判型で報告書としてまとめる作業を行う。こうした作業は、今後の設計課題、デザインの取組での作業訓練になるばかりでなく、将来、行政職や調査会社などでの成果報告作成スキルとして生かされることを目論んでいる。(志村直愛)



校舎実測の様子 (上) (下)

2学年 住宅の設計

具体的な用途を持つ複数の空間で構成された最初の建築設計演習課題は、住宅の設計である。住宅は、最も一番身近な建築であり、使う人を最も具体的にイメージしながら設計する建築である。大学の側の1つの街区を12の分譲地に見立て、それぞれの敷地の特性を読み解き、各自割り振られた家族のための住まいを設計する。最優秀の岩原星来の作品は、設計事務所が併設するという家族設定に対し、設計事務所、住居、それらをつなぐ玄関、ユーティリティ空間の3つのヴォリュームを設定し、それらが角度を変え、ズレながら敷地に配置された構成となっている。住まいの構成だけではなく、外部空間まで丁寧にデザインされた全体の構成と模型表現、プレゼンテーションシートが総合的に評価された。富井遥の作品は、クリエイターの住む家を入れ子構造によって提案した作品。中央のコアには、寝室、作業スペース、水回りが配置され、コアの周囲にリビングや読書スペースなどの生活スペースが展開している。一見すると、どこにでも建っというような、おとなしい佇まいであるが、開口部のデザイン、屋根の掛け方、模型の表現など細部まで考え抜かれた素晴らしい作品である。(佐藤充)

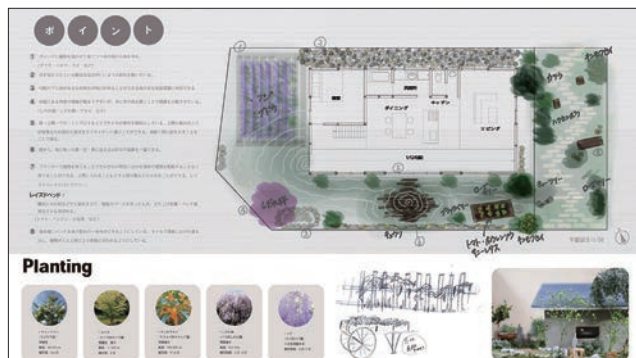


最優秀賞 岩原星来(上) 優秀賞 富井遥(下)

2学年 住宅のランドスケープデザイン

本演習は、前半3週で敷地調査を行い、その後7週の住宅設計を経たのち、後半4週で敷地のデザインを行う。対象地は大学に隣接する住宅街区で、12区画の中央には街区全体で共用する緑地を設定し、敷地と共用地の2つがデザインの対象となる。ゲスト講師にはランドスケープデザイナーの森山雅幸氏、工藤まい氏、佐々木愛奈氏を迎えた。

最優秀の渡邊咲来は、住宅の周りに小径を巡らせ、アトリエでの創作活動のための植物を育て採集できる空間を提案した。素材を探しながら敷地を歩くと歩く人の姿が風景となる。隣接する共用空間は近隣住人も歩くことができるが、敷地と同質なナチュラルな雰囲気緑地としつつ、敷地境界部を地形操作や植栽でデザインし、空間の一体感と領域区分を高度に両立させた。素材を意識した細部の意匠にも気が配られていた。優秀賞の鈴木里奈は、奥行きが深く高低差の大きい敷地特性を活かした庭を提案した。敷地が立地する大きなランドスケープの特性が表れている。微地形を巧みに操作することで住人の多彩な活動を受けとめる空間をデザインした。(渡部桂)



最優秀賞 渡邊咲来(上) 優秀賞 鈴木里奈(下)

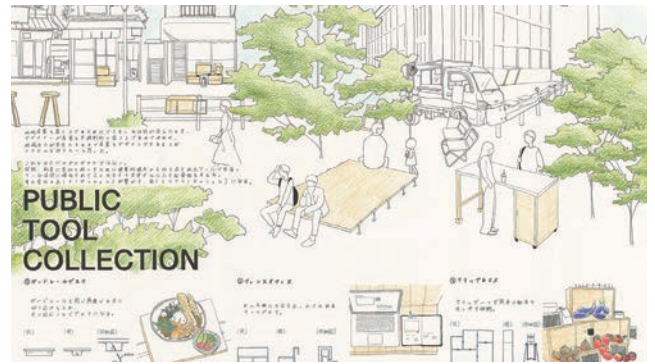
七日町の中心部から程近い敷地でのエコタウンの設計の課題である。テーマはまちの持続可能性を考えることとした。世代を超えてまちがどう変化していくか、どう住み繋いでいくかを考えると多世代による多様性のある暮らしが求められる。そこで、ワンルーム、2DK、3LDKなどのさまざまな住宅のタイプを合計20戸組み合わせることとした。世帯の大きさが変われば、住む人たちの属性が変わり、多世代の家族が住むことが可能になる。また、これに公共的な施設を加えても良いとした。一般的に山形では誰もがクルマを持つことが当たり前だが、このプロジェクトではシェアカーでも良いこととした。まちなかでの生活が前提になれば、必要な時に乗ればそれで良いと考える。学生たちは、理想のコミュニティを語り、日射を出来るだけ取り込めるようにヴォリュームスタディを繰り返し課題を進めていった。配置にはいくつかの特徴がある。ヴォリュームの並べ方に応じて、2列案、3列案などが可能だ。公共的な施設は日射の取得をあまり拘らない。中庭などの関係で配置ができる。最優秀になった奥山拓巳は敷地全体を大きな円環状のデッキをおき、その上に一定の間隔を置きながら、ヴォリュームを配置する案であった。(竹内昌義)



最優秀賞 奥山拓巳(上) 大槻凜花(中) 真壁洋志(下)

中心市街地にある旧第一小学校がリノベーションされ、クリエイティブシティセンター Q1として生まれ変わった。この課題では、施設の目的でもある、地域資源とクリエイティブを掛け合わせるにより、山形に持続可能な産業を生み出すための場をつくり出す企画とデザインを求めた。地域資源のリサーチや取材から始まり、企画書の作成からプレゼンテーション、それを具体的な空間として実現する設計までの総合力を磨くプログラムである。

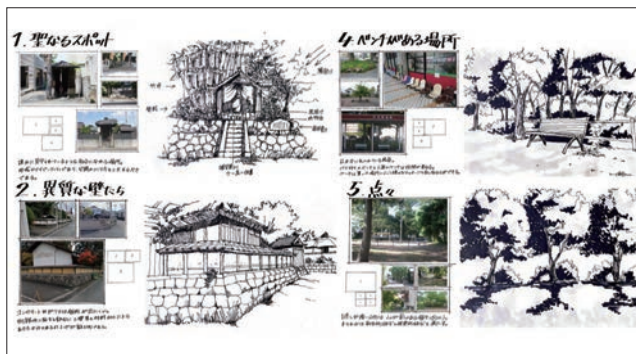
最優秀賞を獲得した早坂愛佳の作品は、Q1を中心としながら、その周辺の街までを対象領域と設定し、道路や公園などの公共空間や空き物件に、小さな工夫がちりばめられ、個人でも可能な街での活動や小商いを誘発するようなデザインが行われた。それにより、空間が持つ意味や可能性が再発見、拡張され、いつの間にか街の風景が変わっていることがイメージできる。ちょっとした風景からの気づきを受け取り、それをポジティブに変換する能力と、すぐにでも実現できそうな実効性が素晴らしかった。岩崎美空の作品は、施設のコンテンツをストリートに展開していくことにより街との連続性を生み出す発想がすばらしかった。(馬場正尊)



最優秀賞 早坂愛佳(上) 岩崎美空(下)

3学年 市街地計画

市内十日町、三日町、八日町を対象地として、市街地を現地踏査しながら土地の魅力や課題を抽出し、さらに魅力的な市街地にしていくためのプランを自由に編み出し、プレゼンボード上にアイデアを表現していく課題である。最優秀賞の早坂作品は、現地で撮影した通算5600枚を超える写真から潜在的なまちの魅力をコード化し、キーワードを並べたA1三枚のプレゼンを全て手書き文字とスケッチで仕上げた力作。デジタル時代だからこそ光る手描きの魅力が発揮されている。(志村直愛)



最優秀賞 早坂愛佳

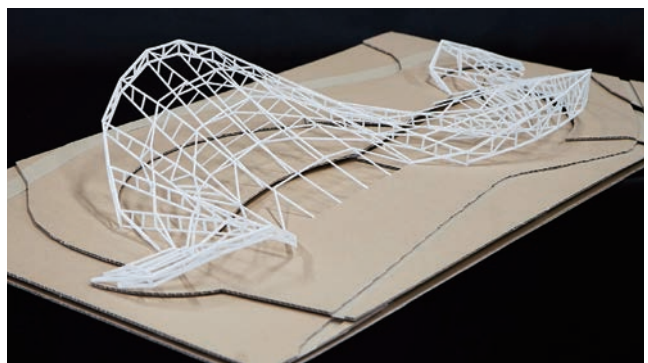
3学年 農村計画

今年は酒田市郡山を対象とした。2回の現地調査を行い、集落環境を地図化する作業を行った。また、住民のヒアリングを行い地域の抱える課題、かつての様子等を聞くことで地区の魅力や住民の願いも浮かび上がった。集落15世帯のうち農業を営むのは1世帯のみと、農地の集約化が進むことによる農村の変質と農村で暮らすことの意味や魅力を考えるものであった。田口周平は現地調査で観察した植生やヒアリング内容を詳細に記録するとともに、集落を紹介する動画も作成した。(三浦秀一)



最優秀賞 田口周平

この演習は、構造設計（架構の構想・具体化）のプロセスを体験して、力の流れを実感しながら設計することを目的としている。講師に構造設計家の木下洋介氏を迎えて演習を進めた。課題は木造による屋内型遊戯施設の設計であり、延べ床面積は2,000m²、メインホールは1,000m²以上という条件が付されている。敷地は市街地と郊外の2箇所からいずれかを選択する。遊戯施設としての機能と大空間をどのように融合させて表現するかが問われる。毎回のエスキスは各自の思考のプロセスを辿れるように、オンラインボードを活用して行われた。最優秀となった真壁洋志の作品は、山形トラスを山並みのように並列させ、その下では大胆に構成された柱と筋交いによって空間を緩やかに分節して、子どもたちの様々な居場所を作り出した秀作である。吉田葵葉の作品は、巻き貝のモチーフから発想したシェルを開いた2層のシェルをフィレンディールトラスとし、屋根面の多様な高低差を実現し、架構と空間の面白さを見出した点が評価された。他にも、空間イメージのこだわりと木造架構をしっかり結びつけた優れた作品が多く見られ、表現も多彩であった。（山畑信博）



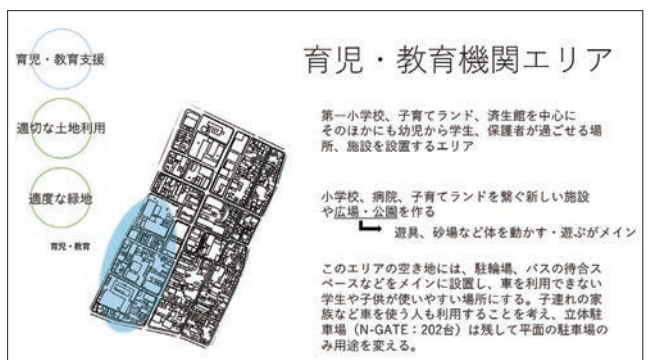
最優秀賞 真壁洋志（上） 吉田葵葉（下）

3学年 ドイツ・山形の都市分析とサステイナブルプランニング

ドイツ在住の学科OB永井宏治氏を講師に迎えてリモートでの指導を受けながら、ドイツの都市計画を学びながら山形市中心市街地の分析と2040年を目指した提案を行った。

演習の流れとしては、持続可能な都市の構成要素を考え、山形市中心市街地のSWOT分析、土地利用分析、そして山形市中心部を再生するためのミクスドユース構造とその実現を困難にする構造・経済・社会・法的障害を検討するという手順で進められた。調査は統計調査や都市計画基礎調査の地図情報も活用しながら現地の建物調査を行うことができた。

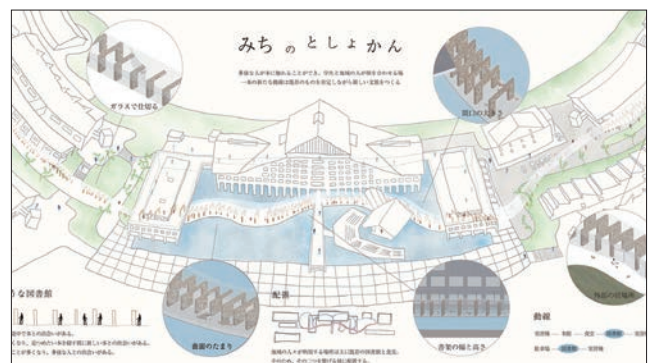
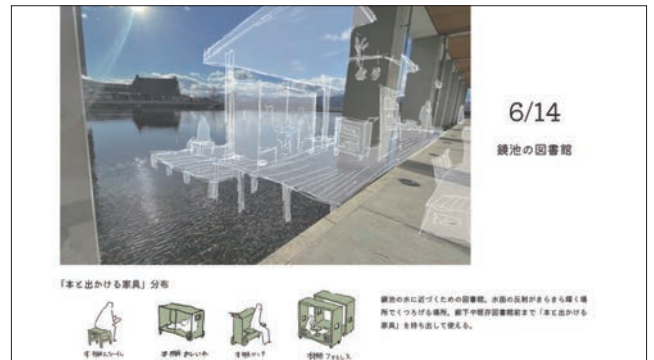
近藤花音は子育てにやさしいまちをコンセプトに山形市中心市街地の15歳未満人口を現状6%から12%まで増やすために、集合住宅や公園、保育園などをつくるプログラムを提案している。浅野百花は、山形市中心市街地における行動パターンを分析し、駐車場を減らして大きな広場的空間を創出し、路面電車やカーゴトラムによる荷運びの導入を提案している。いずれも持続可能な都市づくりとして重要な視点が盛り込まれたものであった。（三浦秀一）



最優秀賞 近藤花音（上） 浅野百花（下）

本学の敷地全体を対象とし、この時代、社会、これからの大学にふさわしい図書館の設計を求めた。図書館の存在意義が、知の集積から、交流や産業を育成のきっかけの場へと変化している今、学生たちがそこに何を求めるかが興味深かった。結果的に、学生たちはこの課題を通し、未来の図書館に対し多様な表現をしてくれた。食堂と融合したり、泊まりながら本が読めたり、街と大学の境界面にあり両方から自由にアクセスできたりと、楽しい図書館の姿が描かれた。

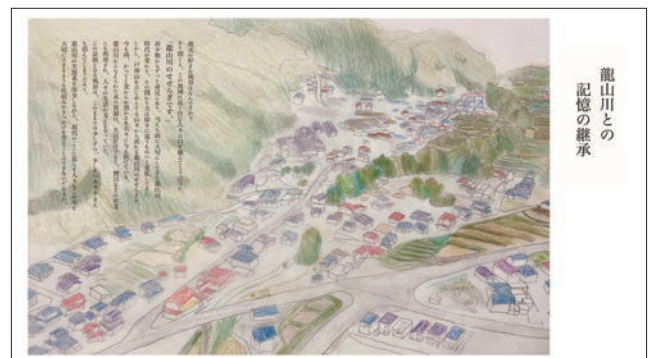
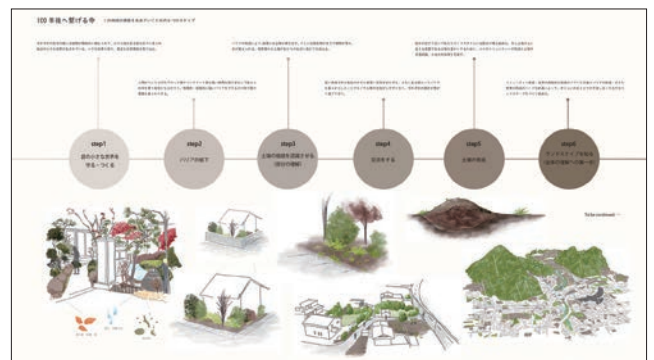
最優秀賞を獲得した吉田葵葉は、大学全体を図書館と捉え、内部や外部の様々な場所に本棚やリーディングスペースが点在し、それが地域にも展開していくような計画を提示した。また、デジタル化が進む中で、本という物体と人が、どう付き合うかまでを示した野心作だった。本はテキストを読む存在から、人と人、人と街をつなぐコミュニケーションの媒体になっていることを改めて問い直してくれた。奥山拓乙の作品は大学前の池に浮かぶ図書館でその大胆な空間構成と透明感のあるデザインが魅力的だ。(馬場正尊)



最優秀賞 吉田葵葉 (上) 優秀賞 奥山拓乙 (下)

風景を美しく健全にすることや、地域特性を活かしながらその場の価値を高めることがランドスケープデザインの1つの方向である。対象地は山形市郊外の岩波を中心としたエリアとし、土地の文脈を理解した上で課題やテーマを導き、将来像を提案した。ゲスト講師に廣瀬俊介氏を迎えた。

最優秀の岩崎美空は、地形地質から土壌特性を読み取り、自然の働きにより人間が生産に利用できる土壌が作り出されることに価値を置いた。対象エリアは市街化区域と市街化調整区域をまたぎ、宅地と農地が混在していたが、より土壌形成が促進されるよう地表の人工物を削ぎ、一筋であってもむき出しの地表を連続させて環境の質と風景を創り出す提案であった。縦横無尽に時間と空間のスケールを捉えたコンセプトが光った。優秀賞の高橋日菜は、対象エリアに流れる龍山川に注目した。水質や流速データを読み解きながら河川の特性を把握し、現代の価値観に合わせた人と川の距離感を設定し、河原で子供が遊び自然に触れる空間を提案した。調査に基づく論理的な解であった。(渡部桂)



最優秀賞 岩崎美空 (上) 高橋日菜 (下)



「栃尾の雁木通り」は新潟県長岡市栃尾地区に立地し、豪雪に奮闘する栃尾の風土が形成した文化的構築物である。各家々が軒を延ばし、私有地を公共のために提供した雁木が連続することで無雪通行空間が形成される。これにより、積雪が生活や生業の営みを阻む冬季においても栃尾の暮らしを通常通り持続させている。冬季だけではなく、雨風や強い日差しから通行を守る全天候型通行空間として機能していることから住民らの社交場や催事の中心地として人々から親しまれている。

誕生は中世まで遡り、栃尾郷が発展した江戸期には最盛期を迎えた。繊維業や醸造業をはじめとする商家が雁木通りの発展に寄与し、現代においても栃尾の暮らしを支える存在である。単なる機能性としてだけではなく、高い歴史的価値を保有していることから現在に至るまで高い残存率を維持しながら継承されている。

雁木通りは新潟県で主に分布しており、県内では当たり前存在である。しかし、自動車の普及等の生活様式や少子高齢化が影響し、雁木通りは衰退傾向にある。栃尾も同様な課題に直面しており、不連続性と次世代への継承が懸念されている。加えて、2006年に長岡市へ市町村合併したことを経て、栃尾らしさを表明していくには地域の価値を認識し、継承していく必要がある。将来的な「栃尾の雁木通り」継承と地域性の表明のために本研究では重要文化的景観策定を仮定した現状分析と価値の再評価を行なった。国選定という正式な評価を通じて継承すべき意義を本研究を通して伝えていく。(五十嵐日和)



雁木通りについてのプレゼンボード(上) 卒業・終了展での展示の様子(下)

講評

自身の故郷長岡市栃尾に中世から伝わる雪対策の構築物「雁木」は、共助＝助け合いの精神を象徴する地域独特の生活文化を示す遺構でもある。国の重要文化的景観の評価軸を用いてその意義、価値を再評価し、今後あるべき方向性を提示した。総延長4.3kmに渡る雁木の実態を全区間に渡って観察、実測調査を通じて丁寧な作図と、解像度の高いデータベース化を実現した。さらには丁寧なアンケートとヒアリング調査を通じて、その成り立ちから維持管理の苦勞、愛着まで、町の人々の思いを徹底して追跡した努力は高く評価できる。また、吸収合併により肥大化した都市の中で遅れがちな地域資産の評価や保全対策に対して一石を投じた功績は極めて大きい。(志村直愛)



地域に溶ける線状大学 - 揖斐線跡地を対象として - 吉田紅葉

18.3kmの廃線跡地を大学にする計画である。敷地は岐阜県岐阜市から揖斐川町まで五つの市町村を繋ぐ名鉄揖斐線の鉄道跡地。名鉄揖斐線は忠節駅から本揖斐駅まで約18.3kmの距離を、22駅で結ぶ鉄道だ。1914年から91年間、岐阜市西郊の通勤・通学路線として使われていた。2005年4月1日に名鉄揖斐線は全廃となり17年経った今、用途のない線状敷地のみが地域に横たわっている。91年間人々を運び生活を豊かにしてきた鉄道の歴史は変わりゆく地域の中で時が止まったままである。

線状大学は地域に触れる面が大きく、地域の様々な人が集まり視点や知識が共有され学びは豊かになる。多くの街を横断し周辺環境には多様性があるため、揖斐線が走っていた記憶と地域の特徴、歴史が継承され続ける学びを各駅に設置する。

大学という華美的な要素を持つ建築は建築自体が地域との壁となる。線状大学では大学という建築が目立たないよう設計した。廃線という線状敷地が既存の大学の在り方とは異なり、地域の特徴を継承した生活に溶ける大学を可能にした。(吉田紅葉)

講評

出身地の岐阜にあるローカル線の廃線跡地を活用して、地元のことを考えたいというプロジェクトである。そこで用意されたのは地域の人が、地域のことを再び学び直すという大学のプログラム。リニアな線路に沿って、廃駅ごとに学科を作り、町に溶け込む大学とした。地域の人々はその場に立ち寄り、談笑し、議論しながら町のことを学び、その中からまちの未来を決めていく。線路に沿って歩くと大学の全体像が浮かび上がる。廃線という記憶を学びの場として変えていくことで地域の未来に繋がる作品である。(竹内昌義)



可動産建築の可能性と模索

- 原付ハウスによる移動空間の研究 - 遠藤悠

本研究は現在の建築や土地の在り方を考えたことから始まった。日本では現在、建築物が有り余っているにもかかわらず増え続ける建築過剰社会や空き家率の上昇など、建築に関わる社会問題が多く存在し、これらはより良い土地の使用用途や有意性を潰しかねない現象といえる。これらの問題や、働き方や学びの支流として生まれた「リモート」から建築や土地の新たな在り方を考えた時、居住空間が土着していることの必然性が薄れていると感じた。本研究では「基礎などで土地と固定せず、移動することが可能な、最低限生活行為が行える定着度の低い空間」を「可動産建築」と定義し、可動産建築の新たな可能性として移動手段の最小サイズに近い原動機付自転車の上に可動産建築を製作、「原付ハウス」で私自身が実際に移動しながら生活、研究を行った。この生活の中で、可動産建築の実用性や実現可能性・改善案を模索するとともに、建築や土地・可動産建築の新たな可能性の模索を目的とした。(遠藤悠)

講評

基礎などで固定せず、移動することが可能な、最低限生活行為が行える土地に対する定着度の低い空間を「可動産建築」と定義し、それは、人間を土地から開放し、その先にさらに豊かな生活があると考えた。限りなく土地に対する定着度の低い「可動産建築」を追求した結果、ミニカー登録を行った3輪原動機付自転車に居住空間を載せた「原付ハウス」にたどり着く。そして、実際にこれを作り旅に出た。新しい挑戦の前には、常に規制の壁が立ちはだかる。旅は、思いのほか自由ではなく、むしろ不自由であった。本作品は、自由を求め社会の規制に立ち向かった「可動産建築」での生活のドキュメントであり、そこから見えてきた未来の風景を示唆している。(佐藤充)



積層する許容と空間ー私有空間の変遷と継承ー 戸田巽

卒業設計のきっかけはスケールについての興味である。家具、建築、土木のスケール、動植物のスケール、地球規模からCADや想像の中の大きさを持たないスケールを研究する中で、人間のスケールとは何か疑問を持った。考えていく中で、スケールとはモノとモノを比較したときに生まれる差であり、人間のスケールとは自分の想像、経験と対象物の大きさが大きく異なったときに知覚できることであった。当たり前の生活の中で想像、経験を越えた大きさの空間、動植物と自分自身が交錯したときにその場が記憶、思い出に残るそれが人のスケールだった。計対象は牛舎の跡地とした。物語を進める中で牛舎という空間を残すために、一人の大人がその場その場で即興的建築行為を重ねていき空間の形態が住居へと変化していく。その過程で子供が小さな行為で自由な空間を展開していくのだ。そこに時間の経過が加わることで大人、子供、牛、植物の生長、建物の劣化、様々なスケールが交差するこの場所が記憶に残る空間となり人間スケールの設計である。(戸田巽)

講評

建築は朽ちながらも、それ自体が次の建築行為の契機となり更新を繰り返す、他の生物も受け入れる。即興的に建築行為が続くストーリーを描いたものである。脚本家が、その場で起こりうるストーリーを書き、そして、演者がそれを演じるなかでアドリブによってさらに物語が展開していくように、建築家が、牛舎の環境を把握した上で、クライアントの要望(その後の物語)をラフに空間化し、既存牛舎と建築家によってつくられた空間のスケール、そして、大人と子ども、さらにはそこに生きるすべての動植物のスケールが衝突したところに、太陽、雨、風、建材の劣化といった時間的スケールが重なりアドリブが展開し、動き続ける不完全で寛容な空間である。(佐藤充)



たむぎのぐらしー地域理解からつくる移住促進プランー 添田はな

天童市田麦野地区における、地区の維持継承を目的とした移住者促進の方法を研究した。

当地区はその大半を山地が占める、人口140人程度の小さな集落である。近年では地区に移住してくる者も増加傾向にあるが、現在では60代以上の住民が地域の中核を担っており、地域行事や、草刈り等の整備活動、地域組織の役員など、次世代へと継承していかなければならない状況である。地域住民へのヒアリング調査等から、移住者と地域を仲介する仕組みが確立されていないこと、地域住民の世代間交流の必要性があることがわかった。そのため、まずは地域住民間の合意形成を図り、移住者受け入れの基盤をつくること、そして新たな移住者を受け入れるための仲介役の強化を図ることの二点が必要だと考える。

具体的には、地域組織や行事を見直し、今後の方針を定めるためのワークショップを提案した。また、地区の窓口となっている公民館が、新たな移住者と地域住民を繋ぐ必要があることを説いた。(添田はな)

講評

本学で地域を支えるサークル活動を通じ、慣れ親しんできた天童市田麦野地区で、少子高齢化、人口減少の時代下に集落の持続性を保っていくための移住者の受け入れをテーマとした研究。1年次から地縁血縁の全く無い地域に飛び込み、長年通いつめて地域の人々からの信頼を得ながら、よそ者としての客観視を大切に冷静かつ熱意を持って地域の課題に取り組む姿勢は賞賛に値する。地方の集落で移住者を受け入れる難しいテーマを扱いながら、足繁く現地に通り詰めての丁寧なヒアリングや現地踏査、現状分析と提案によって、地域に寄り添い地域に応える本学ならではの命題を、理想的な形で追求め、極めて説得力のある実りを生み出すことができた。(志村直愛)



「可動産建築の可能性と模索 - 原付ハウスによる移動空間の研究 -」 遠藤悠 (左上) 「道が生み出す人と車が交わる体験型商業施設」 南條愛佳 (右上)
「伴侶動物との共生生活の研究 - 伴侶動物との共生生活を支援する空間製品の提案 -」 李洗庭 (左下) 「日本終末」 渡邊実有 (右下)

今年の卒業制作も芸工大の特徴がよく出た作品が数多くあった。賞に選ばれたものに限らず、時代の変化や多くの気づきがあるものをここに紹介したい。最優秀賞に選ばれたのは五十嵐日和の雁木の研究をしたもの。地元長岡での雁木の扱いを丁寧に記し、その存在意義を表現してみせた。圧倒的なプレゼンテーションだったと思う。また、ひときわ大きな模型のようなバイクの遠藤悠の作品もおもしろい。モバイル建築として設計、制作、それで東京まで行って暮らしてみせた。等身大の活動が大変興味深い。また、設計にもおもしろい切り口のものが多かった。日常的なものの変化を記述するような案としての戸田巽の作品は現代的なポエトリーとして巧みなドローイングが異彩を放っていた。李洗庭のペットとの生活に注目し一緒に暮らすためのプロトタイプを作ったプロジェクトや南條愛佳の大崎郊外のショッピングセンターで、モビリティの提案をしたプロジェクトなどは現代の暮らしの新しい局面を鮮やかに切りとっていると思う。通常の建築以外にも渡邊実有のイラスト、澤崎桃葉の村上春樹の作品の記述なども新しい取り組みとして評価できる。(竹内昌義)

賞	氏名	作品名	分野
最優秀賞	五十嵐日和	「柵尾の雁木通り」の現状と文化的価値 - 重要文化的景観策定を想定した再評価 -	論文
優秀賞	吉田紅葉	地域に溶ける線状大学 - 掛巻線跡地を対象として -	設計
優秀賞	遠藤悠	可動産建築の可能性と模索 - 原付ハウスによる移動空間の研究 -	設計
優秀賞	戸田巽	積層する許容と空間 - 私有空間の変遷と継承 -	設計
優秀賞	添田はな	たむぎのぐらし - 地域理解からつくる移住促進プラン -	論文
奨励賞	大槻汐璃	街が緑で溢れるための植物園の提案 - 田さくら野百貨店跡地を活用した植物園による街の緑化 -	設計
奨励賞	内海帆乃香	森に通う幼稚園とまちの庭 - 森による学び空間と地域コミュニティの形成 -	設計
奨励賞	渡部菜緒	小さな生産が軸となる新しいコミュニティ空間	設計
奨励賞	南條愛佳	道が生み出す人と車が交わる体験型商業施設	設計
奨励賞	澤崎桃葉	小説における空間表現と想像力の可能性 - 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』から読み解く空間表現 -	論文
奨励賞	板野杏南	地域の絆を深めるための試みに関する実証実験	論文
奨励賞	柿崎有希	山形県金山町におけるソーラーシェアリングの可能性	論文



ストリートリノベーション—エリアリノベーションとウォークアブル政策の取り組みに関する研究— 清水海斗 講評

清水海斗がこの修士論文で新たに用いたのが、ストリートリノベーションという言葉であった。エリアリノベーションは点と点の変化をつなげて面展開する都市計画の新たな方法であるが、点同士をつなぐ公共空間である道路に着目し、その活用を誘発することにより街の変化を促進する方法論を示した。

行政や地域の組織と連携し、ストリートファニチャーなどを用いた社会実験を実行。そのプロセスや、そこで起こった出来事をつぶさに観察、検証することにより、実践的な方法論を組み立てている。コロナ禍の下、屋外での人々の活動が再認識される中、この論文はデザインとともに、組織やマネジメント手法、制度設計などを横断しながら、新たな道路活用とそれに伴うエリアの活性化の可能性を示した。現在、上記の動きが定常的に定着すべく、後輩たちがその意思を引き継ぎ活動を続けている。

なお、この論文は全国の大学院修士論文の展覧会である「トウキョウ建築コレクション2023」においてプロジェクト部門グランプリに選出されている。(馬場正尊)

山形R不動産

山形R不動産は、まちなかに点在する空き物件を発掘し、その新たな活用手法を研究、リノベーションを実践するチームである。ウェブサイトを運営することにより、メディアとして街を観察し続けるとともに、過去には、学生アパートをアトリエにしたり、閉じていた本屋を再生したりなど、様々な物件のリノベーションを手がけてきた。最近では街の楽しみ方を示すメディアとして、マップ等の制作も行っている。

本年度は、中心市街地の使われていなかったマンションのワンフロアを再生するプランをオーナー企業へ提案するなどの活動を行った。フロア全体を学生やクリエイターたちのアトリエ付シェアハウスとし、居住と学びや仕事とが融合した、芸工大生ならではの提案だった。このアイディアは早速採用され、現在、具体的な設計に向けての準備が進められている。

上記のような、山形R不動産での実践を経験した学生たちの多くが現在、社会に出てリノベーションの仕事に関わっている。学生時代から具体的に社会や企業と関わる機会を持つためのプラットフォームの役割も担っている。

山形R不動産は今後も、メディア制作と設計を並行しながらプロジェクトを進めていく。(馬場正尊)



実証実験 (上)
ヤマガタストリートリノベーションプロジェクトダイアグラム (下)



マンションの現地調査の様子 (上)
ミーティングの様子 (下)



ツリーハウス

コロナ禍で中止されていた合宿が再開され、今年度は敷地選びにも幅を持つことができた。寝食を共にして一つのことを共同して成し遂げる経験は、学生時代の貴重な経験の一つとなろう。製作場所は、朝日町のAsahi自然観に決まった。ここはかつて、地場の蜜蝋や空気神社をモチーフにした六号樹を自然観入口の栗の木に製作したところであり、当地のキャラクターである「桃色ウサビ」が出没し、子どもたちを楽しませていた。今回はコテージ入口の木立を敷地とし、自然観の方々のご協力を得て製作に取り組んだ。メンバーは総勢16名であったが、初参加の学生が半数おり、代表の真壁洋志はじめ3年生たちは、リーダーとして手際よく作業を指示していた。また設計班、家具班、企画班、それぞれが責任もって作業を進めていた。そうした中で想定外の事態にも臨機応変に対処する力も身についたようである。蜜蝋によるキャンドル制作ワークショップには、老若男女、様々な方たちが参加し、ツリーハウスに登って、日常とは異なる高い視点からの眺めを楽しんでくれた。設計は例年通りメンバー内でのコンペ（4グループ）から始まった。今回は仮設ということもあり、解体も考慮したデザインが選ばれ、八角形のデッキを上部の枝からロープで吊るしたものとなった。施工は手際よくプレカットして進められた。こうして完成した拾五号樹の下には、ベンチ、テーブルが置かれ、木陰で休憩できる空間が作られた。陽が落ちて暗くなると、キャンドルに灯が点され、「あかり」と名付けられたこのツリーハウスの周辺には、幻想的な光景が広がった。（山畑信博）



早戸温泉環境整備実習

本実習は今年で13年目を迎える。これまで福島県三島町早戸温泉から只見川沿いに延びる遊歩道を整備してきた。昨年度から遊歩道の利用促進に貢献するサイン整備を計画してきた。今年度はその整備を実施した。

コロナ禍の中、十分な感染対策を行いながら2泊3日（9月17～19日）で作業を行った。例年より滞在期間が短いことから、事前に大学でサインの構造や意匠の検討、試作を行い準備した。これまで遊歩道の整備は、当地の自然に配慮した近自然工法で行われてきたことを踏まえ、サインの素材や工法も、木製、埋め杭方式とした。また意匠も最低限の板面の大きさや情報提示に留め、現地の風景の邪魔にならない存在を目指した。

施工は支柱となる丸太の防腐処理から始めた。塗布した防腐剤は自然への影響が少ないものを選択した。サインの板面は、後に手作業で修繕できるよう学生が手描きした。板面の下処理は、地元の佐久間建設工業（株）に協力いただいた。設置は、埋め杭の要領で支柱を据え、そこにサイン板を留めた。既に厳しい積雪を1回乗り越え、問題なく耐えている。

今回の実習では総合案内板が未整備となったため、次年度以降に整備することとしたが、遊歩道をより多くの来訪者に利用いただくために、早戸温泉の休憩所に設置するイラスト地図を先行して作成した。作画は学生が行った。これらの反応を確認しながら次年度以降、総合案内板の整備に取り組む予定である。

今回の実習では、早戸地区から現地滞在の調整をいただいた。資材調達は佐久間建設工業（株）に協力いただいた。滞在や資材の費用の一部は三島町から補助いただいた。また実習の指導役として非常勤講師の田賀陽介氏、卒業生の阿部聡史氏、菅拓哉氏、庄司はるか氏、笠原隼也氏に協力いただいた。皆様へ感謝申し上げます。（渡部桂）



只見町周辺環境整備実習

2011年7月の新潟・福島豪雨でJR只見線が被災し、27kmの区間が不通となった。それから11年の歳月を経た2022年10月ようやく全面復旧となった。只見町では開通に合わせ、沿線や町の振興を図ることをねらい、只見駅からほど近く縁結びで知られる三石神社を観光資源の1つとして位置付け、参道の整備ほか魅力向上を計画してきた。渡部研究室では2020年に参道の調査・設計を行い、2021年に第1期の整備を行った。整備は地元只見区の住民と共にやっている。

三石神社は「只見ユネスコエコパーク」や「越後三山只見国定公園」の中にも含まれており、参道整備では、誰もが歩きやすい環境とすることを念頭に置きながらも、自然環境への配慮も求められた。また整備後の維持管理も必要であることから地区住民と共に整備を実施し、管理や修繕に対応できるよう資材には丸太と碎石を用い、人力施工とした。

第2期となる今年度は、参道の最も奥、要害山の山腹にある三石神社の足元の整備として、主に急勾配箇所への階段設置を行った。整備は6月、8月の2回で行い、延べ65名が参加した。本学科からは7名の学生が参加した。また、9月には多くの鉄道ファンが写真撮影のために訪れる只見線津川橋梁の脇にビューポイントを設け、そこに向かう小径の整備を行った。以上の整備を終えて10月の只見線全面開通を迎えることができた。

当初予定した2カ年での整備は完了したが、只見線沿線の魅力をより磨き、今後の持続的な観光や地域づくりにつなげるため、次年度も事業を発展させ活動する予定である。(渡部桂)



鮭川村空き家等利活用プロジェクト

活動4年目となる鮭川村空き家等利活用プロジェクト事業は、主に「トトロの木」として親しまれ、村の観光名所として多くの観光者が来訪する「小杉の大杉」の周辺エリアについて、ゴールデンウィークなどの交通渋滞、近隣住民とのトラブル解消を目的とし、特定空家を解体し、駐車場と休憩所を整備する基本構想を提案した。単なる駐車場ではなく、村全体の自然資源を活用し、村全体がアウトドアフィールドであると捉え、「寄り道の駅」というコンセプトのもと、村の観光コンテンツを得ることができると共に、キャンプサイトを併設し、シャワーブースやランドリースペースを整備することを提案。稲刈り後の田んぼをお借りし、実際にキャンプの実証実験を実施し、「寄り道の駅」に必要な施設イメージを明確にした。平常時も地域の人々に活用される施設とするために、地域住民との意見交換を複数回、実施した上で、基本設計を進めていたが、村内での合意形成を得ることができず、計画は中断を余儀なくされた。4年間の活動により地域住民、鮭川村担当者との信頼関係が構築でき、これまでの活動がやっと実を結ぶと思っていた最中のプロジェクト中断は非常に残念である。現時点では、プロジェクト再開の目処は経っていないが、今後も継続して鮭川村担当者と連携を図り、プロジェクト再開を目指してゆきたい。(佐藤充)



山形市吉野宿の三堂実測調査続編

山形市内西北部、山辺街道に沿った農村集落である吉野宿地区には、地区の中心部に位置する敷地内に、三堂と呼ばれる歴史的建造物が残っている。本件は、山形市教育委員会が、地元町内会の要望を受けて、三堂の実測調査を行ない、建築記録資料を作成、歴史的評価を明らかにし、国の登録文化財を目指すものである。一昨年に市から本学志村研究室に調査依頼が舞い込み、これを受けて2年度に跨いで実測調査を実施した。対象建築物は、北から順に昭和初期の阿弥陀堂、江戸期に竣工した地藏堂、昭和戦後期に出来た稲荷堂と、時代も形式も異なる3つの宗教建築で、いずれも築50年を超えて登録文化財の要件を満たしている。地理的にも精神的にも地区住民の象徴である三堂は、かつては住民の冠婚葬祭の舞台ともなっており、公益施設的な役割として機能していたとされる。また阿弥陀堂では、江戸期以来の日常行事「御仏供様」（おぶくさま）と呼ばれる珍しい伝統行事を昨年まで継続していた経緯があり、建築物に加えて民俗学的にも貴重な山形の歴史資産としての一面を持っている。調査では、一昨年から志村研究室が市からの依頼を受けて、延べ4回にわたってゼミ所属の3、4年、院1年生が共同で三堂を実測。成果は報告書にまとめられて昨年度末に市を通じて地元へ報告されたが、山形市としては、江戸期の地藏堂は、より手厚い補助が見込める山形市指定文化財への指定を目指す方針を打ち出している。今回、結果を受けて地元町内会代表らが、集落の意向を確認する段取りとなったが、新年度に入り、折角の機会なので、調査依頼された平面、配置図の他、立面、展開、断面図なども研究室ゼミ生を中心に実測し、地区の歴史的な景観や、生活文化の歴史を伝える資産としての価値を明らかにしながら、その評価結果を地元にお返りする目的で自主的な追加実測調査を実施した。（志村直愛）

各種講演会



環境的未來型 工藤浩平氏

秋田県出身で、住宅からまちづくりまで幅広く活動されている若手建築家 工藤浩平さんをお招きしてレクチャーを行った。住宅において描いたものをどのようにつくるかといった検討から、まちづくりを実践する上で、如何に人々を巻き込んでゆかかという、「もの」と「こと」を実現するためのディテールについて丁寧にレクチャーしていただいた。今、最もホットな建築家の話は、学生にとって良い刺激となった。(佐藤充)



環境的未來型 指出一正氏

指出一正さんは、社会や環境の視点から地域を見つめ直す雑誌「ソトコト」の編集長である。「関係人口」という言葉を編み出し、それは日本の未来の地方を語る上で不可欠なキーワードとなっている。指出一さんは、日本中で活躍するまちづくりのプレイヤーたちを紹介し、学生たちに自ら行動することによって切り開くことのできる未来の風景を示してくれた。(馬場正尊)



ワンデイプロジェクト 増田信吾氏

ワンデイプロジェクトの審査員として、増田信吾さんをお招きした。増田さんは1982年生まれ。武蔵野美術大学の出身で、大坪克巨さんとの事務所で共にまちの隙間に楔のような建築を作ったり、建物の部位を丁寧に読み解きながら、その部位自体を魅力的に変えるプロジェクトをされている方である。課題は「生きるため 一切実さと豊かさ」とのこと、無人島に200mのロープと共にあり、それを工夫して生き残るための何かを考える。また、そのディテールを考えるというものであった。実は、最近ワンデイプロジェクトの課題が難しくなり、低学年の学生のアイデアでは上級生に勝てないことが多くなっていたので、事前に増田さんに相談して、誰でもできるアイデアの差が出る課題をお願いしていたのだった。この課題はまさにそれに応えてくれていて、且つ、「建築」の持つ特性、豊かな空間とそれを成立させる技術やディテールなど切実な条件を含んだものとなっていた。最優秀の大槻凜花案は、見事に応えてくれていて、実際にロープの編み方から始まり、無人島での豊かな暮らしを実現できそうであった。(竹内昌義)



最優秀賞「不器用でも生き残る!!」大槻凜花

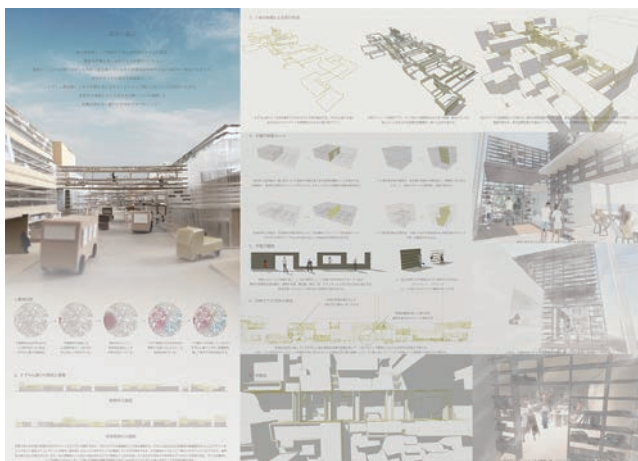
コンクール等受賞者の紹介

JIA 東北建築学生賞

主催 公益社団法人日本建築家協会東北支部

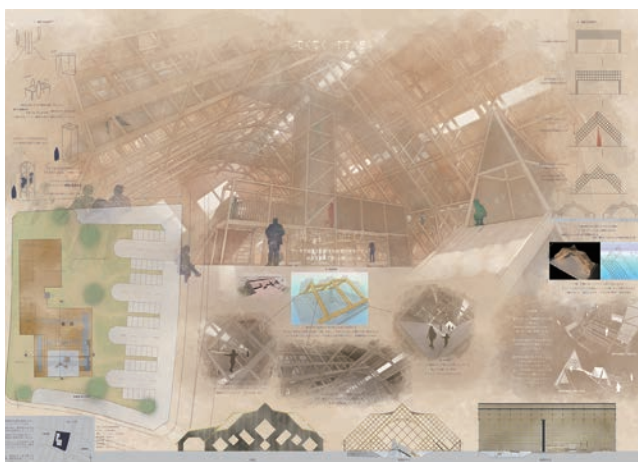
- * 奨励賞（河北新報社賞）「都市の縫合」 戸田翼
- * 特別賞「もくもく ナナメ館」 猪野航誠

JIA東北支部が主催する東北6県の建築を学ぶ学生が、設計演習作品を出品し、JIA東北支部の建築家が審査する設計コンクールである。11校12学科33作品が応募され、出品者はzoomを用いてリモートプレゼンテーションを行った。質疑応答、投票後の議論の結果、戸田翼の「都市の縫合」が、防火帯建築の特徴と地方都市の空きテナントの問題に対して図書館という地域の人々に開放されたプログラムを挿入することで地域の再生を目指している新しい図書館として優れたデザインであるという点が高く評価され奨励賞（河北新報社賞）を受賞。猪野航誠の「もくもく ナナメ館」は、構造と屋内遊戯施設のプログラムが密接に関係している点が高く評価され、特別賞を受賞した。（佐藤充）



奨励賞「都市の縫合」戸田翼（上）

特別賞「もくもく ナナメ館」猪野航誠（下）

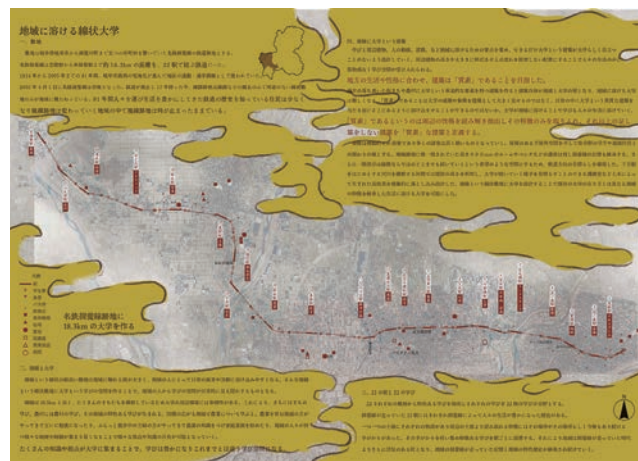


JIA 東北学生卒業設計コンクール

主催 公益社団法人日本建築家協会東北支部

- * 優秀賞「地域に溶ける線状大学
— 揖斐線跡地を対象として —」 吉田紅葉

吉田紅葉さんがJIA卒業設計東北学生コンクールの優秀賞に選ばれた。（内容はp.21参照）この作品のどこが優れているのか具体的に解説しよう。1）敷地の選定が社会的な状況を踏まえている。廃線という現状を受け入れ、それを積極的な価値に転化させた。2）プログラムが現代的である。ライフステージにおける学び直しが必要という認識に基づき、大学というプログラムを選択した。3）表現が豊かである。大きなプレゼンテーション。俯瞰的な視点から小さなスケールまで連続的に表現した。これらが総合的に統合されこの作品は成立している。デザインはひらめきだけではなく、総合的に社会を俯瞰し、新たな価値観を提案し、それを表現するということが求められるのである。（竹内昌義）



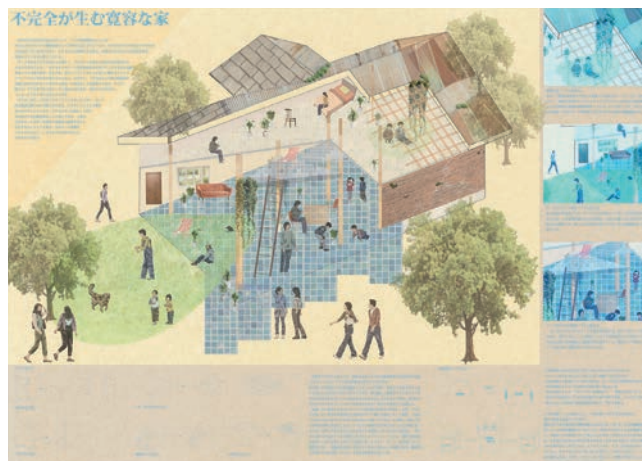
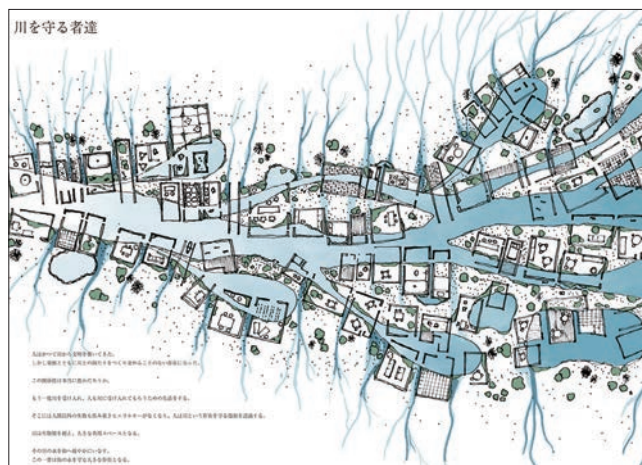
優秀賞「地域に溶ける線状大学 — 揖斐線跡地を対象として —」 吉田紅葉

第29回ユニオン造形デザイン賞「大きな家」コンクール
 主催 公益財団法人ユニオン造形文化財団

- * 金賞「川を守る者達」 早坂愛佳
- * 佳作「不完全が生む寛容な家」 竹澤龍河 後藤樹也

29回目となるユニオン造形デザイン賞は、空間デザイン振興と向上を図るために公益財団法人ユニオン造形文化財団が主催するデザインコンペである。今回のテーマは「大きな家」。審査委員は建築家 平田晃久氏である。嘗て河川流域から文明が発達したことに着目し、河川流域を「大きな家」と捉え、霞堤に住居が絡みつく住まいを提案し、高い評価を得て、見事金賞を受賞した。

以下、審査員講評より引用「自然というものと人の住む場所、あるいは人工的に開発していくような場所との境界線が、もっと多様であり得る、それが、大きな意味で家と言えるような場所になるのではないか、という予言的でもあるような提案。配置図の絵などは非常にインパクトがあり、面白いイメージを掻き立てるものだった。」(佐藤充)

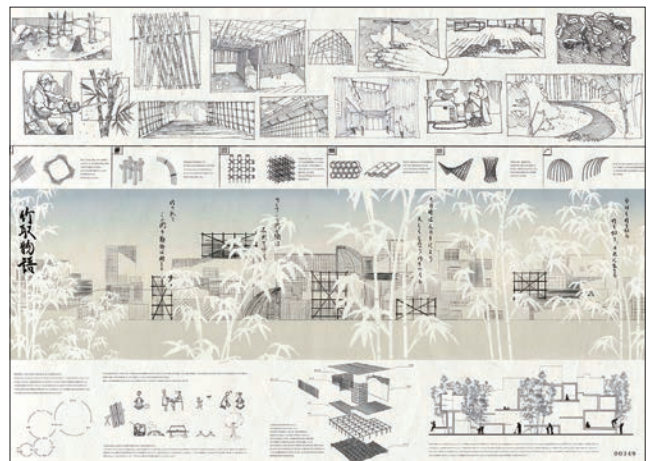
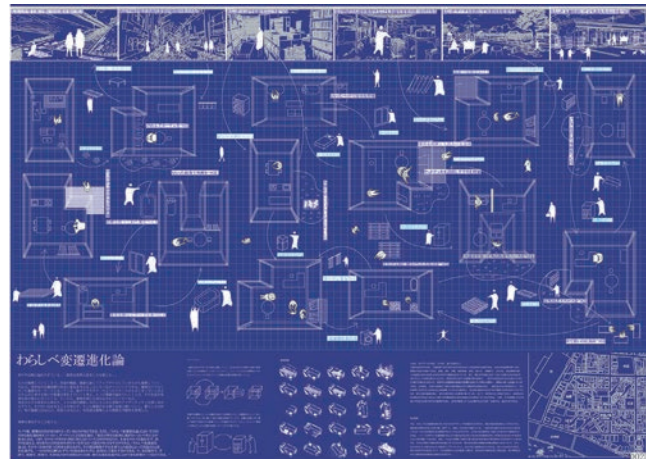


金賞「川を守る者達」早坂愛佳(上)
 佳作「不完全が生む寛容な家」竹澤龍河 後藤樹也(下)

第16回長谷工住まいのデザインコンペティション
 「循環する集合住宅」

主催 株式会社長谷工コーポレーション

- * 佳作「わらしべ変遷進化論」 真壁洋志 竹澤龍河 後藤樹也
- * 佳作「竹取物語」 早坂愛佳 覚張日梨



佳作「わらしべ変遷進化論」真壁洋志 竹澤龍河 後藤樹也(上)
 佳作「竹取物語」早坂愛佳 覚張日梨(下)

東北芸術工科大学

- * 学長奨励賞 早坂愛佳

芸術工学会

- * 奨励賞『「栃尾の雁木通り」の現状と文化的価値
 —重要文化的景観策定を想定した再評価—』五十嵐日和

せんだいデザインリーグ2023

- * 100選「積層する許容と空間—私有空間の変遷と継承—」戸田巽

トウキョウ建築コレクション2023

- * プロジェクト部門最グランプリ
 「ヤマガタストリートリノベーションプロジェクト」修士/清水海斗

東北芸術工科大学 デザイン工学部

建築・環境デザイン学科 年報2022

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2022

発行日 2023年7月29日

編集 佐藤充 加藤優一 大場いおり

構成 倉地亜希子

書式设计 株式会社GKグラフィックス

印刷 田宮印刷株式会社

製本 田宮印刷株式会社

発行 東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科
990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design
3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

URL <http://www.tuad.ac.jp/>

E-mail env.info@aga.tuad.ac.jp



東北芸術工科大学

990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design

3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

E-mail env.info@aga.tuad.ac.jp